

ボランティア・市民活動を広げ、応援する！▶▶

# ネットワーク

創刊400号記念号

特集

## 変わりつづける社会と わたしたちのあいだにある希望



## 変わりつつける社会と わたしたちのあいだにある希望

- 3 400号記念特別企画 あの頃の未来、現在の未来  
～当時の執筆者や取材先に再度話を聞いてみた～  
浜田 忠久／西川 正／佐藤 信行／かながわボランティアセンター
- 9 座談会 わたしたちのあいだにある希望について  
―「人と人のつながり」を考えた夜  
高井 花菜／高岩 大将／大澤 優真／小林 涼帆
- 14 寄稿 「あいだ」の大切さ  
◇佐藤 嘉倫 京都先端科学大学
- 17 書籍紹介

18 つぶやきブレイク Vol.37 豊かな時間 フォルケホイスコーレ

19 セルフヘルプという力 第40回  
一人の人間として生きる権利を  
◇脳損傷による遷延性意識障がい者と家族の会「わかば」

23 未来を描く! 区市町村ボラセン探訪記 Vol.3  
これまで大事にしてきたことを続けながら  
中間支援組織としての取り組みを模索する  
◇江東区社会福祉協議会  
江東区ボランティア・地域貢献活動センター

25 いいもの みい～つけた! Vol.58  
素材にも製法にもこだわった  
ビターチョコレート  
◇社会福祉法人 平成記念会 OUCHI CAFE・KITCHEN



### 表紙のことば

手をつなぐのはおそろしい。  
つないだ先に何があるのかわからない。  
奪われるかも、  
利用されるかも、  
傷つけられるかも、  
悪意でなくても愛ではないかも。  
そんな気持ちもゆるむといいな。  
指先から動くといいな。  
助かりたくない人なんていない。

ーフローラル信子

## もしもボランティア活動中にケガをしたら… ケガをさせたり、物を壊したら…

※ボランティア保険および行事保険の加入は、東京都内の各区市町村のボランティアセンターまたは東京都社会福祉協議会窓口で手続きができます。



東京都社会福祉協議会指定生損保代理店  
有限会社 東京福祉企画

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2  
研究社英語センタービル 3階

TEL. 03-3268-0910  
FAX. 03-3268-8832



# 特集 変わりつづける社会と わたしたちのあいだにある希望

本誌が創刊された45年前とくらべると、社会は大きく変わった。

人びとのふるまいが多様化し、「大衆」とか「どこにでもいる人」というものが昔ほどはっきりとイメージできなくなった。

にもかかわらず、わたしたちはいまだに“わがまま”と言われることをおそれ、それぞれの抱える事情をたがいに伝えあうことが難しい社会は、かえって孤立や分断を生み出しているようにも見える。

また「自己責任論」や「排外主義」の声はおとろえることを知らず、SNS上では今日も見るとたえない攻撃の言葉が飛び交っている。

「共通の展望」をもつことがとても難しくなってしまったこの世界の中で、わたしたちは日々何を大切にして生きていけばいいだろうか。

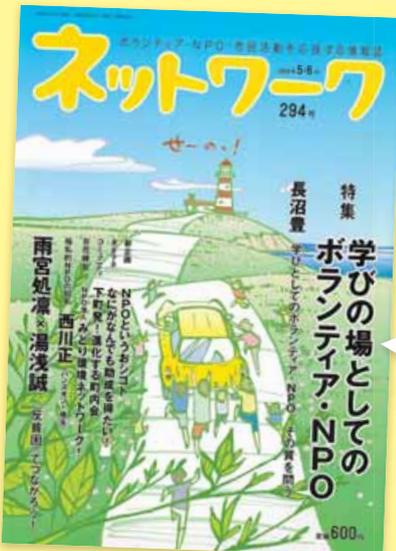
創刊400号を迎える今回は、  
激変する社会におけるわたしたちのこれからや、「希望」について、  
難しいテーマではあるけれど、少しだけでも考えてみたいと思う。

いま  
あの頃の未来、現在の未来  
～ 当時の執筆者や取材先に再度話を聞いてみた～



2009年5月発行・特集『ネットワークってなあに?』より  
浜田忠久さん『情報コミュニケーション技術 (ICT) と ネットワーキング』

2008年5月発行・連載『極私的NPOの10年』第2回  
『市民活動情報センター・ハンズオン埼玉 西川正さん』





世の中の変化のスピードはますます速くなり、怖くなってしまふほどです。この激しい変化を少しでもとらえて形にしてみたい、と考え、こんな企画を試みました。この記事では：

- ①過去の『ネットワーク』から4つの記事をピックアップし、
- ②各記事の作成にあたって寄稿や取材を受けていただいた方々に、再度当時の記事をお読みいただき、
- ③その上で、「当時と現在」をくらべながら、あらためて未来に向けてのお話をお聞きしました。



2012年9月発行・特集『日本にくらす外国人』より  
佐藤信行さん『「多国籍・多民族」社会、ニッポン考』

2014年5月発行・特集『セルフヘルプグループ』より  
『「当事者」と「専門職」のいい関係を大切に かながわボランティアセンターのセルフヘルプ支援』



## 浜田忠久さん『情報コミュニケーション技術 (ICT) とネットワーキング』

(2009年5月発行・特集『ネットワークってなあに?』)から抜粋して再掲:



“ ICTは世界全体を単一の市場とすることを可能にし、様々な情報をいち早く入手し分析することができる世界的な企業はますます有利になり、逆にそのような情報を得られない零細な農家などはより不利な条件を押し付けられる。しかし、別の見方をすれば、ICTはこれまでの流通経路やしくみを通り越して生産者と消費者を直接結びつけることができる。いわゆるP2Pの活用により、弱い立場の個人や組織の自立を促すことができるのである。

一人ひとりの市民が自らの可能性を広げるため、またそのような市民がつながり、より望ましい社会の実現に向けた行動のネットワークを作るため、さらにそのようなネットワークに参加するためのしきいを低くするためにこそ、ICTは使われるべきである。また、ICTの危険性も認識した上で、それに頼りすぎることなく、ICT以外の従来の道具の活用も含めてこれからの情報ネットワーク社会をデザインしていくことは、ICTをすでに手にしている私達の責務ではないだろうか。

”

## 17年後の今、浜田さんに再度お聞きしました。



浜田忠久 (はまだ・ただひさ)

NPO法人市民コンピュータコミュニケーション研究会 (JCAFE) 代表。湾岸戦争の際NGOへの情報ネットワーク支援を機にNGOのコンピュータネットワークの拠点作りの準備を開始し、1993年にJCAFEを、1997年にJCA-NETを有志とともに設立。(写真:河野裕昭)

デジタルの変化の速さには、いまも驚かされます。情報通信技術 (ICT) は、人と人、人と組織の「関係の織物」を編む力を飛躍的に高めました。高速で編める一方、糸が絡むことも増えていきます。絡まりをほどこき、どのように織るかを市民側が考え、選べるようにすることが重要だと思います。

2009年と比べると、情報収集・発信、資金調達、翻訳などでICTは市民活動を大きく支えるようになりました。その反面、SNSは誰でも発信できるがゆえに虚偽情報が拡散し、炎上も目立つようになりました。デジタルは人間社会の鏡で、恐怖や欲望と結びついた負の側面が増幅され、詐欺や偽情報、ウイルス等が蔓延していることに危機感があります。小手先の技術で抑え込むだけでは根本解決にはならず、信頼と助け合いを土台にした社会へと変えていくしかないと思っています。

それでも希望はあります。2003年・2005年の国連世界情報社会サミット (WSIS) では、政府・産業界・市民社会が議論し、市民社会の声を政策に反映する試みが進みました。その流れを受けた国連インターネット・ガバナンス・フォーラム (IGF) は今も続いています。

もちろん参加の偏りなど「NGOの南北問題」は解消されておらず課題も残ります。それでも、異なる立場の関係者が対話を継続し、改善の回路を保つことには意味があると思います。加えて、国連の枠組みを超えた「複線的な対話の場」を、市民の側から育てていく発想も大切だと考えています。

私は数学が専門ですが、数理的思考は直観の偏りを補正し、長期の問題に想像力を与えます。放射性廃棄物の管理のような遠い未来まで続く課題も、確率や時間のスケールとして捉え直せます。また数学的帰納法 (一つ成り立てば次も成り立つ) を繰り返して、無限先まで確かめる考え方) の発想を借りれば、「自分にとって大切な人」を一歩ずつ広げ、世界全体へと拡張する手がかかります。なりませんが、こうした学びの場を増やすことが、社会の形を変える一助になると考えています。

最後に、速さに支配されない場を意識的に確保することが大切だと思います。対面で会い、関係を編み直し、根本からじっくり考える。遠回りに見えても、人々の意識や文化が変わるのはその速度の中でしか起こらず、そこからしか根本的な変化は現れないのではないでしょうか。



## 佐藤信行さん『「多国籍・多民族」社会、ニッポン考』

(2012年9月発行・特集『日本にくらす外国人』)から抜粋して再掲:

“ 今回、(東日本大震災の被災地に)行って見てわかったのが、どんな小さな町や村にも外国人がいるということ。災害救助法が適用されたエリアで外国人が1人も住んでいない町と村は、僕が数えた限りで5つほどしかありませんでした。つまり、外国人は全国至るところに点在しており、その点でも日本は多国籍、多民族、多文化社会といえるのです。しかし、外国人がそれほど住んでいることを知っているのは、行政の中でもごく少数でした。つまり、彼ら彼女らの存在は“地域社会で不可視化”されているといえるでしょう。(中略)

一方、現状では、多くの外国人が地域社会になくなくてはならない存在となっています。被災地から事例を挙げてみましょう。日本人と結婚し、石巻市の外れの海沿いに住んでいた移住女性からボランティアの要請がありました。彼女が、その漁村にあってリーダー格として活動しているわけですよ。(中略)

認める、認めざるにかかわらず、外国人の存在なしに日本社会は成り立たないのです。別の視点からいえば、多民族共生社会を創ることは、日本社会にも相乗的な効果をもたらすということなのです。”



## 14年後の今、佐藤さんに再度お聞きしました。



佐藤信行 (さとうのぶゆき)

在日韓国人問題研究所『RAIK通信』編集長、外国人住民基本法の制定を求める全国キリスト教連絡協議会 事務局次長、移住者と連帯する全国ネットワーク 理事、人種差別撤廃NGOネットワーク 運営委員会世話人、福島移住女性支援ネットワーク 代表等。

「日本にくらす外国人」という特集テーマで取材を受けたのが2012年、その後の変化を中心にお話します。

まず、自身の活動について。取材当時に結成した福島移住女性支援ネットワークの活動は現在も続いています。白河市において、日本人と結婚したフィリピン人女性を対象に日本語教室を立ち上げ、ベトナムの技能実習生が多く参加するようになり、コロナ禍前は、白河からふるフェスティバルを毎年開催していました。来日間もない子どもの日本語教室も行っており、多文化キッズキャンプ福島を年に1度開催しています。最初は中国とフィリピンの子がほとんどでしたが、今は10ほどの国籍の子どもが参加しています。外国人が少ない福島県にもさまざまな国籍の人が暮らし、その人口も倍増しています。

次に、社会全体の变化について。日本はさらに移民社会に移行しました。永住資格取得者や技能実習生、専門的・技術的労働者が増加し、父母とも外国籍または父母の一方が外国籍の子どもも増えています。今や100人につき4人が外国ルーツの人と推算されます。

そうした状況にも関わらず、排外主義の声が大きくなっており、外国



子どもの日本語教室の他、自分のルーツの言葉を学ぶ継承語教育もしている。「ここで学んだ子どもたちがこの社会を担うことが自分にとっては希望です」と佐藤さん。

ルーツの人に対する制度的な差別もあります。昨年には、全国各地で移民政策反対デモが行われました。そして、選挙でも同様の声が聞かれます。私たちは人権NGO8団体で緊急会見を開き、排外主義の煽動に反対するNGO緊急共同声明を発表しました。今年2月11日から「ヘイトにNO! 全国キャンペーン」を展開しています。地域住民が外国ルーツの人と触れ合い、偏見を一つずつ減らしていけるような取り組みを、多くの人にアイデアをいただきたいながら積み上げたいと思っています。

冒頭のフェスティバルのチラシは、市役所が全戸に配布してくれました。今の状況をなんとかせねばと考えている人や団体は潜在的に多くいるはずで、そうした人びととつながり、ともに動くことが希望への架け橋になると考えています。

## 『「当事者」と「専門職」の「いい関係」を大切に かながわボランティアセンターのセルフヘルプ支援』

(2014年5月発行・特集『セルフヘルプグループ』)から抜粋して再掲:



“

さまざまな課題を抱えている人のなかには生活困窮状態にあったり、心の問題を抱えていたりして、電車に乗ってKVC(かながわボランティアセンター)まで来るのが難しいという人も少なくありません。自分の住む地域で活動を立ち上げたり参加したりできるといいのですが、現状では、地域を拠点に活動をするのは難しい場合も多いようです。(中略)

地域レベルでのSHG支援機能の普及は大きな目標のひとつですが、それを枠組みからつくり上げていくことは簡単ではなさそうだと感じています。むしろ、各地域のVCなり、公民館なり、包括支援センターなり病院なりが、日頃の利用者支援の取り組みのなかに当事者活動への視点を自然に取り入れ、SHGを応援する存在になっていってくれるような、そんな「あたりまえ」を目指していく。そうしたことが大事なのかとも思います。そのために、セルフヘルプ活動について「まずは知ってもらう」機会を、できるだけ提供していきたいと考えています。

”



社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会  
かながわボランティアセンター

かねてから当事者団体活動を支援してきた中で  
ボランティアセンターとしては、全国にさがかけて  
セルフヘルプ・グループの支援に注力してきた。

## 12年後の今、

## かながわボランティアセンターさんに再度お聞きしました。

相談内容は、既存の活動テーマで

一方、SHG立ち上げに関する  
活動見学を希望することや支援者  
からセルフヘルプに関する問い合わせ  
が増え、関心が高まっている  
ことを感じています。

「生きづらさ」を抱える人やその家  
族は、一人ひとり向き合っている状  
況が異なり、ゆえに孤立しやすく、周  
囲からの理解が得られないことで心  
が傷つくことがあります。そうした  
方々が「ひとりじゃない」と感じ、気  
持ちを分かち合える場が、セルフヘ  
ルプ・グループ(以下、SHG)です。  
本会では、1988(昭和63)年に  
策定した県社協活動推進計画に当事  
者活動の支援を掲げて以来、30年以  
上にわたりSHG活動の支援に取り  
組んできました。

様々な生きづらさを抱える人やそ  
の家族が向き合っている生きづらさ  
そのものは決して軽くなったわけ  
ではありません。しかし、学校や職場  
における配慮や制度が少しずつ整備  
されたことに加え、SNSやメデイ  
アを通じて個人の経験が共有されや  
すくなり、多様性を尊重する価値観  
が浸透してきたことで、社会の理解  
は以前よりも広がっているように感  
じます。実際、この数年、本会でイン  
ターネットを行う大学生がSHG  
の活動見学を希望することや支援者  
からセルフヘルプに関する問い合わ  
せが増え、関心が高まっている  
ことを感じています。



かながわボランティアセンターは  
横浜駅から徒歩5分、かながわ  
県民センターの中にある。  
(写真は神奈川県公式サイトより)

あっても参加対象者をより限定した  
グループや、複合的な悩みを抱える  
グループなど、よりコアで個別性の  
高い内容へと変化してきているよう  
に思います。また、地域によって支  
援の質や情報の届き方にばらつきが  
ある状況は依然として見られます。  
こうした状況を踏まえ、2021(令  
和3)年度からは、市町村域におけ  
るセルフヘルプ活動の支援をより一  
層強化するため、SHGと関わり  
のある対人援助職、社協職員、行政職  
員など専門職を対象にした講座を実  
施し、地域でSHG活動の支援体制  
やSHGそのものへの理解を深めて  
いく取り組みを進めています。

本会としては、これからもSHG  
の持つチカラと可能性を大切にしま  
ながら、安心・安全な居場所づくりを  
継続するとともに、SHG自身に  
よる主体的な取り組みを支え、広域  
のSHGの応援団としての役割を果  
たしていきます。



座談会

# わたしたちのあいだに ある希望について

## 「人と人のつながり」を考えた夜

練馬区にある「はっこう基地」に集まっていたとき、こたつにあたりながら、自由に語り合いました。

### 「共感」と「分断」と

——「人と人のつながりかた」の変化について考えたいなと思いました。たとえばコロナ禍以前と今とでは、どんな変化があったと思いますか？

**高岩** オンラインで会うということが増え、選択肢になって、つながりの多様性は増えたなと感じています。

**高井** 私は子どもに関わる仕事をしているので、子どもにとってのコロナ禍というのがすごく大きかったと感じています。マスクで表情が見えないとか、学校でもお友だちとの触れ合いが減ってしまい、成長過程で情緒的な関わりを必要とするはずの

子どもたちへの影響はすごくあったと思います。そうした問題がコロナ禍後すぐに表層化してきたお子さんもいれば、今になって出てきて、なんで引きこもっちゃうのかわからないようなケースもあつたりします。今後も、いつ表層化してくるかわからないというのが、また難しい問題だと思えます。

**大澤** つながり・共感と分断、両方あつたなと思つてます。

私はつくりの東京ファンドという支援団体に、2014年からずっと生活に困窮されてる方々の支援をしてるんですけど、コロナ禍ではいろんな人が困窮したり困つたりしたわけですよ。そこから、困ってるから助けなきゃねっていう共感が少し生まれたなというところは、支援の現場で実感していました。外国籍の方だと、難民の人だったり、あるい



“「人と人のつながり」を考えた夜”  
に集まっていたみなさん



“「壊れにくい日常」  
を作っていくことが  
希望につながる。”

高岩大将  
(たかいわ・だいすけ)  
「はっこう基地」代表



“次に会ったときに  
またお話ができたり、  
逆に話さない選択もあったり。”

高井花菜  
(たかい・かな)  
スクールソーシャルワーカー、  
「はっこう基地」スタッフ



“承認ってやっぱり  
現代の大きな  
問題だと思う。”

小林涼帆  
(こばやし・すずほ)  
明治大学学生、  
本誌編集委員



“ケンカをすることもなく、  
仲良くなることもなく、  
ただずっといる。”

大澤優真  
(おおさわ・ゆうま)  
一般社団法人 つくろい東京ファンド  
事務局長

は「仮放免<sup>1)</sup>」という就労を許されな  
いカテゴリーの人たちがコロナ禍を  
きっかけに入国管理局からたくさ  
ん出てきて、生活がすごく困ってし  
まったときに、多くの人が手を差し  
伸べました。共感とかつながりが当  
時すごい増えたというのが実感と  
してあります。

一方で、分断もやっぱりあるなど  
感じています。コロナ禍以降、残念  
ながら生活格差が開いていくんです  
よね。その中で、本当に厳しい生活  
をしている人たちのことを、そもそ  
も自分の周囲にいないから想像がで  
きないという人たちがいて、たとえ  
ば「仕事ができなくて何もしていな  
い」と言う、「それはあなたの責任  
でしょう?」みたいな反応がまた強  
まってしまっている。

外国籍の方についても同様で、  
ちょっと前まではいっしょに日本で  
暮らしていこうよっていう空気も  
あったけど、背景にいろんな状況が  
あって「外国人はちょっと」とみた  
い話も最近は出てきている。SNS  
の影響も大きいと思います。

「選択肢と「消極的おせっかい」

—今の社会には「つながれない」「つ  
ながらない」人も少なくなっている

いかと感じています。

高岩 つながらないことを選べる自  
由が求められている一方で、つな  
がりたいという思いは切実に存在して  
いるようにも思います。そのどちら  
も選択できることが大事だし、そう  
した自由さが今後求められていくの  
かなと思っています。

そういう思いもあって僕たちは今  
ここに住んでいるので、そうした選  
択ができるような仕掛けとか、そう  
したあり方というものを作っていき  
たいという思いはありますね。

高井 子どもの話になりますが、た  
とえば対面で会うのはハードルが高  
いけどバーチャル空間でなら会える  
とか、オンラインで音声だけなら、  
チャットで文字だけでならOKみた  
いな子もいるので、つながりかたの  
多様性が増えていったらいいなとは  
思います。

学校から支給されるなどタブレッ  
ト端末に触れる機会も多い世代な  
ので、オンラインを介し意気投合し  
て「じゃあどこどこ行ってみようよ」  
だとか、何かアクションを起こせる  
例もあるので。

大澤 ちょっと毛色の違う話かもし

れませんが、私が支援させていただいている皆さんは生活に困窮されているだけじゃなくて、社会的なつながりがなくて相談できる相手もない方も多い。やっぱりつながらないとやっていけないです。支援者も同じで、当事者の方とつながらないといけないし、支援者同士でもつながらないといけないし、あとはこの問題を全く知らないような方ともつながらないといけない。そこから始まらないので。どういう未来が来るかはわかりませんが、つながっていききたいですね。

今の困窮者の方々というのはたとえ「タイミー」のような、人と密に接しなくても働ける働き方がある。密なかわりで働くのはしんどいという人はいて、それはそれで尊重されるべきだと思います。お二人のお話ともつながりますけど、いろんな選択肢を作っていききたいというのはあります。いろんな形でいろんな人とつながって、どうにか困窮している人が困窮し続けなくても済むようにしていきたい。

**高井** 孤立している人ほどどんどん孤立しやすい、負の連鎖みたいなものがすごく起きやすい環境にあるのかなと思います。支援者もいろんな

ところとつながっていく必要があるし、アウトリーチという、こちらから出向いていく支援のあり方を増やしていくことが孤立している方への一つのアプローチになるのかなと思います。あらゆる狭間、あぶれてしまう社会をともに生きていくために、その必要性をいつも考えています。

手を伸ばしても手をつなぎたくない人もいますよね。そこは受け取れる時が来たら受け取ってもらおうというぐらいの「消極的おせっかい」で、気づいたら傍にあつたぐらいの距離感でいたい。手を伸ばせば届くし、こちらはいつでも手を取れる状態にいる、みたいなニュアンスを持たせたいなと思っています。距離感はどう度、試行錯誤的な感じですが。

——「人と人のつながり」というテーマに関連にして、何か紹介していただけるような話があればぜひ。

**大澤** もう10年以上、「鍋会」という食事をしています。ホームレス状態になった人は保護して、その後アパートに移ってもらって、という支援をしてきましたが、「家があったも孤立はしちゃうよね」ということで始めました。でも今はそんな感じでもなくて、どちらかというただ

やってるだけ(笑)。でもそれがいいなど思っています。

「鍋会」には、中高年層の男性を中心に毎回20人ぐらいいらっしやいます。で、たとえばある人がわーって話すと別の誰かがわーって返す。でも全く会話になってない。だけど誰もそれを責めない。黙々とご飯を食べ続けてる人、寝てる人もいたりとか、勝手にそうなっちゃってる(笑)。

居場所でもないけど、「何でもありだよ」という場でもない。自然発生的に出来上がった空間で、しかも人は入れ替わってたりする。で、誰も何も言わない。ケンカをすることもなく、仲良くなることもなく、ただずっといる。でもたくさん来る。なんとなくみんないる、みたいな。

性別、ジェンダー、年齢、宗教、国籍など、いらっしやる方はいろんな背景があるけど、そこにはふれない。私は支援者として関わりましたけど、その立場がちょっとぬける瞬間もあって、楽だなんて感じています。

ご近所付き合いでもないし、NP Oがやってる居場所事業でもない。こんな空間は珍しいかもしれないですね。毎月最終火曜日って決めていて、なんとなく集まって、コロナ禍の時以外はずっと続いています。頑張ってる感じはない。続けよ

うとも思ってもない。

**高井** お話を伺って、以前住んでいた高円寺を思い出しました。銭湯とかコインランドリーとか、水回りを共有する文化がもともとあって、そこでは誰も名乗らず、無理せず、でもお互いに何度か顔を合わせると名乗らないまま話が弾むとか、そういうコミュニケーションのあり方がたくさんあって。じゃあ、おやすみなさいで別れて、次また会えた時にはまたお話ができたり、逆に次に会った時は話さないという選択があったりというようなゆるやかな感じ。で、勝手に続いていく。その街で生きていくかぎり続いていく関係性というのがまた面白いなと。

**高岩** 普段街を歩いていて人から話しかけられる機会ってなかなかないですよ。一方、はっこう基地では週1回地域でごみ拾いをしてるんですが、そうすると通るかかった人が「こんにちは」「こんばんは」と挨拶してくれたりします。ごみ拾いが「声かけの言い訳」になって、つながるきっかけになるんですよ。こちらから挨拶をしても大抵の人が応えてくれます。

挨拶はやっぱり気持ちがいいです



大澤さんのお話に  
たびたび登場した「鍋会」の様子。  
(写真提供：つくろい東京ファンド)

つくろい東京ファンド

し、こんなふうになんとつながる「言  
い訳」をいっぱい増やしていけると  
いいのかなと思っています。

### なんとなく過ごして、 関係ない話でしたい

——居場所みたいな場所に行くのが  
怖いか、身構えてしまう人もいると  
思います。そこで振り落とされたら、  
もう行き場がないとか、そういう感覚  
もあるかもしれません。みなさんご自  
身の「つながること」に対する課題は  
ありますか？

大澤 居場所って言われると身構え  
ちゃうかもしれませんが。話が戻っ  
ちゃいますが、「鍋会」は来てもいい  
し、来なくてもいいし、来たって別  
に愛想良くする必要もないし、何も  
聞きません。知らない人もいるし。

職場以外でそういう場所を見つ  
けたいと思ってる人はいるかもしれ  
ません。居酒屋みたいなものが入口  
としてはいいのかもしれませんが、  
でもお酒を飲まない人もいるし、お  
金もかかりますよね。

「鍋会」は、承認ともまた違うんで  
すよ。承認されてるわけじゃないん  
ですけど、でも別にいちゃいけない  
とも言われてない。そういう場所が

あると楽でいいと思います。これは  
なんて呼べばいいんでしょうね。

高井 肩書なしでいられる、みたい  
な点も大きくないですか？ 私は高  
円寺では、職業名も出さない、年齢  
やジェンダーも話さないコミュニ  
ケーションがあって、私のままでい  
られるというか、それが楽だったり  
もしたなと思うので。

大澤 そうですね。私は博士課程に  
いたときに、ずっと一人で研究を続  
けていくのが結構辛くて、結局半年  
ぐらい仕事を休ませてもらったんで  
すが、そうすると行く場所がないん  
ですよ。

辛いつて言いたいわけじゃないん  
だけど、どこか行って、なんと  
なく過ごして、関係ない話でしたい。  
そんな場所があるとクサクサしな  
いですむし、いいなと思ってたんで  
すが、でもそういう場所って意外とな  
いんですよ。お話ししましょうの会  
とかだとちょっとハードルがあるし。  
そういう意味で「鍋会」がやれてる  
のはちょっと運がいいなって思っ  
ています(笑)。

——「希望」についてうかがいます。私  
たちはこれから、どんなところに希望



今回場所をお借りした「はっこう基地」。  
高岩さんと高井さんの活動拠点でもある。  
西武池袋線・大泉学園駅から徒歩15分。  
(写真提供：はっこう基地)



を見ていけばいいでしょうか。

大澤 希望は大事だと思います。つながらなきゃいけないってさっきお伝えしましたけれども、つながれば希望が出てくると思いますし、「力を合わせて」みたいな綺麗事じゃなくて、本当にそうだと思っています。いろんなところで分断が進んでいるなという実感はあって、分断が進むと意見が少し違うだけでも「あの人は悪人だ、もう駄目だ」ってなっちゃう。だけどそこで共感とか想像力を持って、他の人と意見が違っても「あの人はそう思うんだね」っていうところで踏みとどまれるのかなと思います。

同じ地域で生きていけばずっとそこでいっしょにやっていかなきゃいけない。やっていく中で豊かなものも見えてくるんじゃないか。小さいことから大きいことまで、どういふうにつながれるかということを努力しています。たとえばつくろい東京ファンドでは毎月1回、難民のためのスリランカカレーチャリティーイベントをやっています。「実はこういう人たちがいて、こういう状況で、だからこうなってるんだよ」というのを共感してもらえる土壌づくりとして開催しているんですが、ご

近所さんがいっぱい来てくれます。

高岩 僕は自分のやりたいことって何だろうっていうのが大学時代までわからなかった人間なんですけど、そうしたことを言語化できる、「どうしてそう思ったのか」を話し合えるような環境がすごく大切だなと思っています。たとえば中高生年代にとってはその相手は私たちでもないと思いますし、友達同士でも、そこに家族が入ってきてもいい。そういう環境と、話した後の進展をゆっくり待ってもらえるような環境があるのもすごく大事だなと。

それと、いま大泉ではっこう基地をやっている、この街を愛するきっかけをいっぱい展開させていきなかって思っています。まずは目の前の壊れない、「壊れにくい日常」を作っていくことが大事だなと。さっきの高円寺の話もそうですが、行きつけのお店があるとか、八百屋さんでいつもこの店員さんと話すのが楽しいとか、そういう壊れにくい日常というものを作っていくことはちょっと先の希望にもつながっていくのかなと思います。

小林 学習支援塾でアルバイトをしていたことがあるんですが、勉強が

できないことを責められたりして苦手意識をもっている子どもたちが、だんだん前向きに取り組んでいけるようになっていく様子にはすごく希望を感じていました。

私が大学で入っているサークルは「貢献しろ」みたいな圧がすごく強いところなんです。で、そういうものを求めない場っていうのはやっぱり貴重なのかなと思います。

子どもの頃に無条件に承認してもらえた経験って大人になっても残りますよね。承認ってやっぱり現代の大きな問題だと思うし、承認してあげられる場を用意したりとか、そういう取り組みが世の中を良くしていくのかなと思っています。

——興味深い話をたくさんいただきました。みなさん、どうもありがとうございました。ございました。

\*1 入管施設に收容された外国人が、健康上の理由等により一時的に收容を解かれる制度。在留資格は付与されず、就労は禁止され、定期的に入管へ出頭しなければならぬ。

\*2 「スキマ時間にすぐ働ける」を謳うスキマバイトマッチングアプリ。近場の短時間求人を検索し、1時間〜数時間の短時間だけ働くことができる。

寄稿

# 「あいだ」の大切さ

佐藤嘉倫（京都先端科学大学）

## 1・「あいだ」と「希望」

今号の『ネットワーク』の特集は「わたしたちのあいだにある希望」についてです。これは私が専門にしている社会学と深く関係します。社会学では2人以上の人々の関係を「社会」として研究をしています。2人の人が相互に関わるとそこに社会は存在します。このように言うとは違和感を持つ人もいるかもしれませんが、ふつう社会はたくさんの人から成り立っていると考えられるからです。地域社会や日本社会のような感じですが、しかし見知らぬ2人の人が災害時にエレベーターに閉じ込められたとしましょう。今まで他人だった2人ですが、エレベーターから脱出するために協力してドアを開こうとしたら、そこに社会が生まれます。一方、われがちにエレベーターから出ようとして喧嘩になっても、社会学者はそこに社会が生まれていると考えます。常識的に考えて、前者は望ましい社会ですが、後者はそうでは

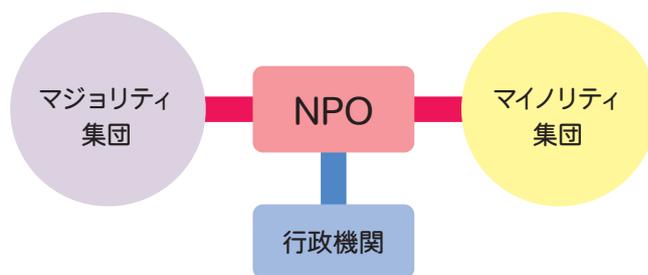
ありません。このことは、人々の関係次第で望ましい社会が生まれることもあれば望ましくない社会が生まれることもあることを示しています。このように考えると、人々の「あいだ」がいつも「希望」を生み出すとは限らないことがわかります。しかしできれば「あいだ」が「希望」を生み出してほしいですよ。ここではどうやったら「希望」を生み出せるのか考えたいと思います。

## 2・ソーシャル・キャピタルという考え方

私は社会学の中でもソーシャル・キャピタルというものを研究しています。カタカナでわかりにくいですが、しかし「ソーシャル」と「キャピタル」に分解するとわかりやすくなります。「ソーシャル」は今お話しした2人以上の関係のことです。ここで重要なのはそのような関係が「キャピタル」すなわち「資本」になるということなのです。

まず資本の分かりやすい例としてお金を考えましょう。お金でハンバーガーを買って食べることもできますが、株に投資することもできます。それでは人はなぜ株に投資するのでしょうか。もちろん儲かると考えるからです。100万円を株に投資するのはその株が将来100万円以上になると期待しているからです。たとえば100万円で買った株が1年後に110万円になれば、10万円の利益になります。これが投資に対するリターンです。

ソーシャル・キャピタルという概念もこの投資とリターンに着目したものです。人間関係に投資することで将来リターンがある、という発想です。ただしソーシャル・キャピタルはお金よりも話が複雑です。まず、リターンはお金とは限りません。たとえば仲のいい友達とカフェでおしゃべりしたとしましょう。カフェで1人で黙ってコーヒーを飲むよりもだんぜん楽しいですね。この楽しさがリターンになります。



図：橋渡し型ソーシャル・キャピタル(赤線)と  
連結型ソーシャル・キャピタル(青線)

また、ソーシャル・キャピタルに  
対する投資もお金とは限りません。  
一緒にカフェに行ってくれる仲の  
いい友達がいるのは、それまでにその  
友達と一緒に時間を過ごし親しく  
なったからです。この場合は、友達  
と一緒に過ごした時間を友達との  
ソーシャル・キャピタルに投資した  
と考えることができます。

そして重要なことは、たいいていの  
場合、人々は将来のリターンを考え  
てソーシャル・キャピタルに投資し  
ているわけではないということです。  
将来友達に助けてもらおうと思っ  
て時間を使って友達と付き合う人な  
らうと思いませんか。楽しいから付  
合っているだけです。しかしこの付  
き合いがいざというときリターンを  
生み出してくれます。1人暮らしで  
高熱が出て動けないとき友達に電話  
して助けてもらうことができるのは、  
その友達と楽しい時間を過ごしてき  
たからです。逆に言うと、将来のリ  
ターンを求めて友達と付き合う人は  
利己的な人間だと見透かされていざ  
という時に友達も助けてくれないで  
しょう。

### 3. 「あいだ」が「希望」を 生み出すのに貢献するNPO

やっと「あいだ」が「希望」を生み  
出す要因を考える準備ができました。  
「あいだ」が「希望」を生み出すため  
には、まずは人と人がつながらなけ  
ればなりません。もちろん趣味が合  
う2人が友達になるなど、自然につ  
ながる場合もあります。しかしそう  
ではないことも多々あります。

1つ例をあげましょう。2011  
年3月に東日本大震災が起こった時  
に私は東北大学に勤めていて仙台に  
住んでいました。私の家は内陸部に  
あったので無事でしたが、実に多く  
の人が津波で家を失い仮設住宅に住  
むようになりました。阪神淡路大震  
災の時も指摘されたことですが、こ  
の時も人々が仮設住宅で孤立する傾  
向がありました。今まで会ったこと  
もなかった人と近所になってみても私  
には付き合えませんか。そこで私  
の同僚はボランティアとして学生と  
一緒に仮設住宅に行って集会所でた  
こ焼きパーティなどのイベントを開  
催して住民たちのつながりを生み出  
そうとしました。ソーシャル・キャ  
ピタルとしての「あいだ」を作り出  
す活動です。

このようなボランティア、NPO、  
NGO(ここではまとめてNPOと  
呼ぶことにしましょう)の「あいだ」  
を作り出す活動は世界中に見ること

ができます。イギリスの例をあげま  
しょう。イギリスでは移民政策とし  
て「多文化主義」が推進されていま  
した。簡単に言えば、多文化主義と  
はお互い——この場合はマジョリ  
ティであるイギリス市民とマイノリ  
ティである移民——の文化を尊重し  
て共存しようという政策です。多文  
化主義政策の前は同化政策で移民に  
対して「あなたたちはイギリスに住  
んでいるのだから英語をしゃべるよ  
うにしてイギリスの文化を受け入れ  
なさい」と同化を促す政策でした。

この同化政策に比べれば、多文化  
主義政策は移民の文化を尊重する点  
でより優れたものだと言えるでしょ  
う。しかしこの政策の結果としてイ  
ギリス市民と移民の間に分断が生じ  
ました。「あなたがたはあなたがた、  
私たちは私たち、お互いの文化を尊  
重するけれど交流はしません」とい  
う形の分断です。そしてこの分断が  
移民コミュニティを孤立させてしま  
い、過激な思想が育まれたと考えら  
れました。

この反省を踏まえて打ち出された  
のが「コミュニティの結束」政策で  
す。ややわかりにくい用語ですが、  
英語ではコミュニティ・コヒーショ  
ン(community cohesion)です。  
コヒージョンという英単語はある集

団の結束が実現して集団としてまとまっている状態を表す言葉です。この言葉が表すように、コミュニティの結束政策ではマジョリティ集団とマイノリティ集団に分断されたコミュニティを1つのまとまったもの

にすることが目標として掲げられています。これは同化政策とは違い、それぞれの文化や言語を尊重しながら、お互いの交流を促進してコミュニティとしてまとまることをめざす政策です。

そして、ここが重要なことですが、このコミュニティの結束政策の実現にNPOが大きな役割を果たしています。NPOがマジョリティ集団とマイノリティ集団の間に入って、さまざまなイベントなどを行うことで両者を橋渡ししています。分断されていた両者がNPOを媒介としてイベントなどで出会い共同作業などをします。そうすると、今まで話したこともなかった両者が「別に怖い存在ではないし、同じ人間で話せばわかる」というように相互に理解できるようにになります。このようにして、分断されたコミュニティが結束されていきます。まさに両者の「あいだ」が「希望」につながっていきます(コミュニティの結束政策について関心のある方は安達智史『リベラル・ナ

シヨナリズムと多文化主義』(勁草書房)をご覧ください)。

#### 4・ソーシャル・キャピタル ふたたび

このコミュニティの結束政策におけるNPOの活動をソーシャル・キャピタルの視点から整理してみよう。先にお話ししたように、コミュニティの結束政策ではNPOがマジョリティ集団とマイノリティ集団を橋渡ししています。図で表すと右上図の赤い太線のようになります。この関係は橋渡し型ソーシャル・キャピタルと呼ばれるものです。

ただしNPOがこのような活動をするためには行政機関との関係も重要です。地方自治体などの行政機関はNPOよりも資金や情報などを多く持っています。しかしNPOのよ

うに草の根レベルで活動することは苦手なのでNPOとのつながりを活用したいと考えています。このNPOと行政機関のつながりは連結型ソーシャル・キャピタルと呼ばれています。図の青い太線です。

このように、コミュニティの結束政策の現場においてはNPOが集団間の橋渡し型ソーシャル・キャピタルを構築し、行政機関と連結型ソ

#### 5・移動、

#### ソーシャル・キャピタル、 NPO

まだまだ語りたいたことはありますが、紙幅の関係上いざに移動の話をしたいと思えます。『ネットワーク』394号の特集は「みんなが自由に移動できる社会を!」です。個人

的な話ですが、私は昨年の春に道で転んで大腿骨にひびが入り人工股関節にする手術を受けました。手術後はしばらく移動できず外で人と会うこともままならず、私のソーシャル・キャピタルは大きく減少しました。このことは移動というものが実はソーシャル・キャピタルと深く結びついていることを示しています。

この特集ではNPOが人々の移動を支援する活動を報告しています。この活動は単に移動を支援するだけでなく人々の希望を生み出しています。移動↓あいだ(ソーシャル・キャピタル)↓希望という流れは高齢化する日本ですます大切になっていくでしょう。



佐藤嘉倫(さとう・よしみち)

東京生まれ。東京大学大学院社会学研究科単位取得退学。東北大学より博士(文学)の学位を授与される。横浜市立大学商学部助教授、東北大学文学研究科教授を経て現在は京都先端科学大学人文学部学部長・教授。専門分野は社会学で、特にソーシャル・キャピタル、社会的不平等、社会変動、AIと社会の関係等を研究している。近著に『AIはどのように社会を変えるかーソーシャル・キャピタルと格差の視点からー』(共編、東京大学出版会)などがある。

# ◇書◇籍◇紹◇介◇

今回の特集を企画するにあたって編集部で読んだ本のなかから4冊、ご紹介します。

## いこく 違国日記

ヤマシタモコ / 2017-2023 祥伝社 FEELCOMICS / 全11巻

作家でひとり暮らしの槇生は、両親を亡くした15歳の姪・朝をひきとって、いっしょに暮らすことになる。

「あなたがわたしの息苦しさを理解できないように、わたしもあなたのさみしさを理解できない。それはあなたとわたしが別の人間だからだ」「あなたの感じ方はあなただけのもので誰にも責める権利はない」「歩み寄ろう、わかり合えないから」「まず対話することを忘れないで」

そんな言葉が繰り返し、槇生から朝に向けて投げかけられる。「わたしは“普通のこと”が満足にできない。そのように生まれてきてしまった」といった吐露も交えながら。

思えば、自分を殺してでも“普通”に合わせることが当然とされ、それができない人は揶揄やイジメや排除の対象とされることが当たり前だった時代を過ぎて、「そうではない世界」をめざして私たちは歩いてきたはずだ。しかし今、槇生のように、たがいに相手の幸せを侵さないためにそれぞれの得手不得手や守るべきものを言挙げしておくことを、大切にできる人がどれだけいるだろうか。結局私たちは今でも、たがいに自分の思いや事情は飲み込んで、既存の空気に合わせていくことを美德としてしまっただろうか。その先に、多種多様な人の幸せを尊重できる未来は来るだろうか。

ちょうど今シーズン（2026年冬クール）、テレビや配信サービスではアニメシリーズも展開中。



## 遅いインターネット

宇野常寛 / 2020 幻冬舎

徹頭徹尾鋭利な言葉で現代社会に切り込んでゆく。

テック企業が主導するグローバル経済が世界を席捲し、既存の国民国家的な秩序を凌駕し、中間層を没落させつつある。不安にかられた大衆は排他とポピュリズムに走り、トランプ的なものを生み出すようになってしまった。「これから民主主義は、もたざる者の負の感情の発散装置になるしかない」と、それに合わせて国民国家は自由と平等に背を向けていくだろうという。民主主義を暴走させないために、「個人と国家の中間に、家族でも地域社会でもましてや戦後的企業のムラ社会でもない、現代的な連帯のモデル」がどうしても必要だと説く。

後半では書名にもふれていくが、「遅いインターネット」は、「人間を（考えさせない）ための道具になっている」現代のインターネット、とりわけX等のSNSに対するアンチテーゼだ。「発信の快楽に溺れることで、より安易に、愚かに、そして拙速になっていった」現代人に、その快楽を「一度忘れて」もらい、「良質な読者」として成熟した上で「もう一度良質な発信を身につけてもらう」ための試みであり、そのための場づくりを実践していくという。

盛り沢山でとても書ききれない本。興味のわいた方はぜひ。

## ぼっちのままで居場所を見つける 孤独許容社会へ

河野真太郎 / 2024 ちくまプリマー新書

『アナと雪の女王』に始まり、『ジェイン・エア』『ウォールデン 森の生活』『ダロウェイ夫人』等の英米文学や『葬送のフリーレン』など、さまざまな作品を通して、近現代人の「孤独」の性質とその変遷を読み解いてゆく。最終章においては2013年に都内でホームレス女性として亡くなった「小山さん」の遺作群である『小山さんノート』にも触れ、現代における社会的孤立についても問う。

その上で著者は、新自由主義時代における「排除型社会」が孤独・孤立の問題を深刻にしていることを確認しつつも、(旧来の家族制度にもとづく)かつての福祉国家体制への回帰も問題の真の解決にはならず、『アナ雪』のエルサが抱いたフェミニズム的な自由への希求は決して否定されてはならないとして、「孤独許容社会」、すなわち「誰でもソリチュード（肯定的な孤独）が得られる社会」を作ってみようと言く。でもどうすれば？ という問いについては、「簡単な解決などあり得ない」としながらも、ひとつの可能性として、「孤独でいられる安全と自由」を与えてくれるものとしてのベーシックインカムを提案している。

現状の社会文化や政治思想からは距離のある提案のようにも思えるが、著者はまた「別の社会を想像しようとする想像力」をもつことをつよく呼びかけてもいる。たしかに、弱者や少数者の生が改善されてきた過程というのは、まさにそうした想像力のみがもたらした成果の連続だったのだ。



## みんなの「わがまま」入門

富永京子 / 2019 左右社

381号でもご紹介したけれど、名著なので再掲。

「満員電車がづらい!」「上司の言い方がキツイ」「制服のスカートが寒い」……これって身勝手?

「わがまま」は「自己中」ではない。みんなが「わがまま」を嫌っているかぎり、みんなおたがいに我慢しつづければいけなくて、困っていることがあっても言えなくて、いつまでも困ったままだ。世の中には多様な人がいて、いろんな考え方、価値観をもっている人がいる。自分が「わがまま」を言えたら、人の「わがまま」にもやさしくなるのではないだろうか。

『わがまま』言ってみよう! という実践編までついていて、みんなに読んでほしい、世の中を生きやすい場所にするための必読書。



ワークショップにて

# 豊かな時間 フォルケホイスコーレ

フォルケホイスコーレとは、デンマーク発祥の成人教育機関である。成績表も試験もなく、学び合う学校。別名「人生の学校」と言われている。

そんなフォルケホイスコーレをモデルとした学び舎が北海道の東川町にある。名前は、「School for Life Compath」(以下、Compath)

Compathが大事にする在り方は3つ「人生について学ぶこと」「自分たちが住む世界について学ぶこと」「他者の考え方を理解し、受け入れることの意味を学ぶこと」。この3つの在り方を軸に文化やアート、自然や哲学、食を通して、ともに学ぶ。

私が初めて参加した回は8日間のショートコースで合計20人弱の18歳〜50歳の参加者が集合した。<sup>\*</sup>はじめましての人々との共同生活は極めて新鮮で多くの学びをもたらしてくれた。他者とのバウンダリー、つまり相手も自分も居心地の良い空間をつくるにはどうしたらよいかを考え、いつも以上に相手を知り、自分を見つめる意識が強くなったように思う。相手の

大切にしたいこと、自分が大切にしたいこと、どちらも諦めずに大事にしながら共に過ごすことを模索する営みは、社会という大きな営みの最小単位の民主主義であるように思う。

ある1日の時間割はこんな感じ。朝起きて、ご飯を食べ、朝のワーク(森の散歩)。その後、みんなで生活空間をそうじする。そして自由時間。お昼に世界の料理を学びながらみんなで料理をつくり、午後のワークショップ。夜は地域の方が来てくれて一緒にごはんを作って食べ、お風呂に入ってから就寝。大抵みんな夜な夜な語り合っている。

私が参加した回ではグラウンドルールの中に「いまこを楽しむ」「判断を保留する」「共につくる」というものがあった。

毎日とてつもない情報を受け取り、選択と決断を繰り返す日々を過ごす私たちにとって、今すぐに答えを出さないことを意識し、目の前の出来事だけに集中することの心地よさを感じる。そして自然との距離が近く、五感をフルに活用できる喜びと、また人との出会いも大切にすることから、あらゆるところで会話が生まれ、つなが

りが紡ぎだされていた。Compathで過ごす時間は、自分とは異なる他者と「共に暮らす」ことを学ぶ小さな集合体であり、自分と出会う場でもある。

最後に、その日のプログラムが始まる前と終わった後に必ず今の気持ち共有する時間がある。授業に参加するための準備でもあるし、自分の状況を伝える時間でもある。「チェックインします」その場に入る(参加する)ことを表す言葉。「チェックアウトします」その場から離れる(終わり)の言葉。年齢も肩書きも関係ない。誰かと比べる必要も、評価されることもない。フラットな関係性の中で紡ぎだされる対話。

どこにも正解はない。自分の考えていることをその場に置く。共有したくなったら話し始めればよい。

他者の言葉に耳を傾け、自分と向き合う。豊かさとはこうしたことを言うのだろうか。(mirie)

<sup>\*</sup>これまで10代〜70代の参加者300名以上が参加。



セルフヘルプグループとは、共通の悩み、問題を抱える人やその家族が自発的に活動を行う集まりのことです。このコーナーでは、セルフヘルプグループの思いや活動内容を紹介し、社会の認識を深めたり、他のグループの運営のヒントとなることをめざします。

## 一人の人間として生きる権利を

### 脳損傷による遷延性意識障がい者と家族の会「わかば」

今回は、脳損傷による遷延性意識障がい者と家族の会「わかば」の藤岡香栄さん、横山恒さん、武藤光行さんにお話を伺いました。

#### ● 遷延性意識障がいについて

「遷延性意識障がい」とはどのような状態なのか、教えてください。

【藤岡さん】

食事、排泄、移動が自力でできず、コミュニケーションを取ることが難しく、医療的ケアを常に必要とする状態です。その中でも、いわゆる「植物状態」と「最小意識状態」に分けられます。後者は、体の部位を動かすことで最低限の意思表示ができる状態です。さらに回復する過程で「高次脳機能障がい」へ移行する方もいらっしゃいます。

遷延性意識障がいの主な原因には、交通事故等による脳損傷、脳梗塞などの脳血管障がい、心疾患や医療過誤などによる低酸素脳症があります。全国で約5万5千人の患者がいると言われています。

かつては、「植物状態」と呼ばれ

ることが一般的でしたが、どんな状態でも本人の意思がなくなるわけではなく、私たちは「遷延性意識障がい」という言葉で社会に知ってもらうように願っています。

#### ● それぞれの家族のお話

— 皆さんのご家族のお話を聴かせていただけますか。

【藤岡さん】

私の母は、2011年9月に突然、勤務先でも膜下出血を発症して倒れ、病院に救急搬送されました。脳の手術自体はうまくいきましたが、その後、高熱が続いて、意識がわからなくなりました。病院には長くいられないため、病院や老人保健施設でリハビリをしましたが、目立った改善がなく、2014年に有料老人ホームに入居しました。

遷延性意識障がいの場合、気管切開や胃ろうをしている方が多く、医療行為が必要になるため、施設を探す上でネックになることもあります。また、母のように意識障がいがあると、居室の中でじっと過ごすことがメインになりがちですので、家族が毎日通って声かけをし、車椅子



藤岡香栄さん

に移して、ゼリーやヨーグルトを食べさせていました。好きな音楽を聞いてにっこりしたり、声のするほうに視線を向けたりしてくれたときは嬉しかったです。

その間、予想外だったのは、新型コロナウイルスの感染拡大が始まり、面会ができなくなったことです。まったく会えない期間が数カ月単位で続いたのですが、感染したら危険ということもよくわかるので、本当にもどかしかったです。ようやくコロナ禍が明けて毎日会えるようになったときには、身体の拘縮がかなり進んでいて、口からの飲み込みも難しくなっていました。それでも家族が通い、体をほぐすマッサージをしたり、痰吸引をしたり、口の中をきれいにしうまく息ができるようになりハビリを続けていたのですが、2024年5月に他界しました。施設の助けもあって、なんと14年間、生きてくれたと思っています。どんな状態に

なっても、周りに愛されて穏やかに生きられることを教えてくれた時間でした。

### 【横山さん】

私は娘（長女）の話になります。自転車で横断歩道を渡っていたところ、わき見運転のトレーラーにはねられて救急病院へ搬送されました。1999年12月30日のことでした。元日の朝、病院から富士山が綺麗に見えて、「これは絶対良いことあるよ」と話していたのを覚えています。それから26年が経ち、今では最小意識状態まで改善して字も書けるようになりました。

最初はじつと一点を見つめているだけだったのですが、事故から1年くらい経った頃、病室へ行くと、娘が待っていたようにこちらを見ているということがありました。そこで、私も何かやってやろうとベッドの前でわざとラジオ体操を試みた



横山恒さん

ところ、「グフツ」と笑ったんですよ。「やったー」と思いました。あきらめないぞという気持ちになりました。

遷延性意識障がいの場合、半年を過ぎたらリハビリテーションの効果がないと言われて、多くの病院では寝かせきりになりがちです。集中的にリハビリができる場所はそれほど多くありません。娘の場合、自宅を少し改修して在宅で生活していた時期もありましたが、家では刺激も少なくなりがちです。そのために、いろいろな病院や施設を転々となりました。

——リハビリができる環境があることが大事なのです。

3か月ほど入院していたリハビリの専門病院では、電動車椅子を勧められました。最初は、私が目の前に立って「ストップ！」と言っても平気で足を轆いてきたりしましたが（笑）。普通の車椅子では介助者の都合でどこへ向かうかが決められてしまいますが、電動車椅子だと本人が自分で意思決定できることが大きいです。その病院へ行ってから娘の動きに積極性が出てきました。本人なりに何か気づくものがあったのだら

うと思えます。

今は、障がい者支援施設で暮らしています。まわりは高次脳機能障がいの人がほとんどですが、お祭りやイベントなどがあって刺激も多く、笑顔がたくさん出るようになり、楽しく過ごしているようです。私たちが家族も通いやすいように施設の近くへ引越すことにしました。

### 【武藤さん】

私たち夫婦は1989年に結婚して、翌年の10月5日に妻が出産したのですが、そのときに医療事故があり、17分間呼吸が停止しました。妻と生まれたばかりの娘は、別々の病院に救急搬送されましたが、医師からは、妻は回復することはない、と言われました。当時、函館に住んでいましたが、東京の病院で電気刺激治療を受けることになりました。それでも、しばらく意識が回復しない状態が続きました。

遷延性意識障がいでも、特に低酸素脳症の場合は1年で亡くなるケースが多いそうです。長くて3年、5年経てば生存率は0%と言われたのを覚えています。それでも、決してあきらめずにやってきたのですが、3年経ったある日、テレビで志村けん

のお笑い番組をやっていて、妻が笑い出す場面があったのです。それを見た看護師が担当医師に伝えたところ、「遷延性意識障がいの人が笑うなんて絶対にありえない」と信じてもらえなかったそうです。ところがその後、その医師が病室にいたときに妻が笑っているのを見て、医師は驚きながらも納得したという話があります。

かつては、「遷延性意識障がいは治らない」ということが常識になっていた。今は、脳波を機械で測定することで、患者に意識があることが科学的にも証明されつつあります。自分では意思を表出できず意識が閉じ込められる状態があるということ、医療従事者をはじめ、皆さんにもっと伝えていかなくてはと思っています。また、リハビリなど治療をすればまだまだ回復する可能性があることも訴えていきます。

——食事はどうされていますか？

当初より口から食事を摂ることは厳禁でしたが、私の要望を担当医師が受け入れてくれ、少しずつリハビリをしてきました。そのおかげで、経口で食べられるようになりました。今でも胃ろうはしているものの、3



武藤光行さん

食、私の介助で口から食事をとっています。もともと、妻は食べるのが大好きでしたので、そのことが生きる喜びにつながっているようです。

29年の入院の後、今では在宅生活を続けて7年になります。私は会社を辞めて介護にあたっています。週4回定時にヘルパーさんが来てくれますが、週3回はデイサービスへ通っています。夜は私が見ています。というのも、結婚して1年後に起きた事故でしたので、気持ちはずっと新婚のままなのです(笑)。夕方から朝まで家族以外の人が家にやってくるということはありません。なので、その時間帯はゆっくり食事をするなど家族で過ごす時間を大事にしています。

### ● 家族の思い

——事故の後は介護と育児の両方をなさってきたんですね。

#### 【武藤さん】

子育ては初めての経験でしたので大変でした。とくに娘は元気だった頃の母親を知らないし、最初はお互いが「あなた誰？」というような顔をしていました。娘にも葛藤があったと思います。それでも、妻を在宅で介護するようになってから、「お母さん、会社行ってくるよ」と声をかけるようになって2人の関係も少しずつ変わってきました。

#### 【横山さん】

事故に遭った本人はもちろん大変なのですが、家族もとても影響を受けています。うちは娘が2人いて、妹(次女)は社会人なのですが、職場で昼休みが一番つらいそうです。まわりの皆が楽しそうにおしゃべりしているのに、自分は同じように楽しく過ごせないというのです。もちろん、周りは何も悪くないのだけれど、しんどい思いを抱え続けている家族は少なくありません。家族に対するケアはまだ十分とはいえないです。

#### 【藤岡さん】

健康だった人がある日突然、まるっきり変わった状態になってしまふのが、遷延性意識障がいの大きな

特徴です。ゆるやかに病気が進行するのではなく、突然絶望の淵に立たされるので、以前の状態を取り戻したいという家族の切実な思いは強いのです。私も母親が発症してから数年ちかく毎日泣いていました。外では笑っていても、家に帰るとつらい思いをしている家族も多いのです。

#### 【横山さん】

先が見えないのは、「親なき後」のことです。在宅ではヘルパーが1日中付き添ってくれるわけではないし、今は私が長女の成年後見をやっています。この先、誰に任せればよいのか、家族の代わりになるような公的な仕組みが充実しているわけではありません。

先ほど、家族で娘の施設の近くに引っ越したとお話しましたが、会いに行くのは週1回くらいで、逆にそれ以上は行かないようにしています。この先を考えると、いつかはそのときがやってくるはずだし、家族だからできることを施設の人にも理解してもらいたいし、そのことを本人にもわかってもらう必要があると思うからです。

### ● セルフヘルプとしての家族会

——「わかば」の活動について教えてください。

#### 【藤岡さん】

1998年7月に、遷延性意識障がい患者を持つ家族が互いに励まし、助け合うことを目的に活動が始まりました。当初は10名ほどでしたが、現在は首都圏を中心に250名ほどの会員がいます。

会の活動としては、家族が互いの思いをゆっくり語り合えるよう、2か月に1回、ランチ会を開催したり、年3回ほど学習会を開いて、家族が必要な知識を得られる場を設けています。また、介護で外出が難しい家族もいらつしやるので、会報を年2回発行して、学習会の内容や会員からの近況報告など情報の共有も大切にしています。

#### 【武藤さん】

「わかば」に参加してびっくりしたのは、家族の人たちは悲しい気持ちを抱えて大変な状態なのに、みんな笑顔なんです。私も後で気づいたんですが、そのような場がほかにないのですよね。自宅で話す相手もない

いし、感情を出す機会もない。それでも、家族会に行くとは悩み事も打ち明けることができるし、笑顔になれる。ポジティブであきらめない気持ちにもなれる。治療法は無いと言われてる中、最新の治療法などについての勉強会も定期的に開催される場です。

#### 【藤岡さん】

私は母が倒れて数年経ってから、「わかば」のホームページにたどり着きました。遷延性意識障がいの場合、配偶者、子ども、親など、患者が多世代にわたっていることが特徴



2カ月に1回開催しているランチ会の風景

ですが、ずっと自分の家族のことを考えているだけでなく、違う立場の方の話も聞くことで新しい学びがあります。あと、家族を看取った人たちが会の運営に少しでも役立てるようになると、そのまま会員として活動に参加する特徴もあります。お互いの状況を尊重しながら、あきらめない気持ちをもって、孤立しないようにゆるくつながることを大事にしている場だと思っています。

#### ●人間として大事にされる場を

——皆さんからのメッセージがあればお願いします。

#### 【横山さん】

当事者への治療やリハビリなどはこれまでもずっとやってきました。が、家族の負担をどうしたらよいかとか、親なき後をどうするか、講演会を開催しても、その会限りのものとして流れてしまいます。やはり公的なシステムとして考えてもらいたいと思っています。

#### 【武藤さん】

最新の脳波実験により、脳波を読み取ること、妻に意識があること

が科学的にもわかったのですが、そのことをかつて入院していた病院の看護師に伝えたところ、妻に「ごめんね」と何度も謝っていました。入院中、妻はふつうの人として扱われてなかったのでしょうか。遷延性意識障がいに限らず、病院で寝たきりになっている人はたくさんいますが、それでも人として生きる権利を持っていて、きちんとケアを受ける必要があると思います。

#### 【藤岡さん】

やはり、希望を捨てないことだと思います。さまざまな五感への刺激を受けて、あるとき意識が反応を見せることがあります。何もできないから安静にしておくのではなく、朝起きて、音楽を聴いたり、人と交流したりして、夜は眠るといって、人間として大事にされながら心地良く過ごせる場所があることを望みます。私自身、母が遷延性意識障がいになるとは思ってもいませんでした。他人事ではなく、誰しもそのような状態になり得るということを知ってもらえたらと願っています。

インタビュー…金井聡（相談担当）

高橋真悠、荻野亜蘭（編集部）

## 脳損傷による遷延性意識障がい者と家族の会「わかば」

不慮の事故や病気などの脳損傷による遷延性意識障がい者と家族が、互いに励まし合い、助け合い、少しでも支えになることを願い、1998年から活動しています。

**キーワード** 遷延性意識障がい、脳損傷、交通事故、リハビリテーション、介護者なき後、きょうだい

**運営メンバー** 遷延性意識障がい者の家族

**活動内容** 学習会、ランチ会の開催、会報の発行など

**参加できる人** 遷延性意識障がい者とその家族

**活動エリア** 東京近郊 **集まれる場** あり

**連絡先** wakaba.office2025@gmail.com

**Webサイト** <https://wakaba-senensei.com/>



公式サイト

TVACでは、区市町村のボランティア・市民活動センター（以下「VC」）を支援する事業の一環として、各区市町村のVCにお話を伺い、VCとして大事にすべきことを検討するプロジェクトを行っています。

今回は、江東区VCにお話を伺いました。  
従来の「江東ボランティア・センター」が、令和5（2023）年度より「中間支援機能」を担うために「江東区ボランティア・地域貢献活動センター」へと再編され、これまで行ってきた事業も活かしながら、中間支援組織としてどのような取り組みをしていくかを模索しています。

## これまで大事にしてきたことを続けながら 中間支援組織としての取り組みを模索する

江東区では、ボランティア講座の受講生の活躍の場であったボランティア相談コーナーを前身として、昭和58（1983）年に区役所の隣に江東ボランティア・センターが開設されました。江東ボランティア・センターでは、ボランティア活動の需給調整及び相談助言を柱に据えて、ボランティア講座やボランティアの育成、企業の社会貢献活動への支援、ボランティアのグループ化の支援・助言育成、福祉体験学習と、夏体験ボランティア等を行っていました。

中間支援組織の必要性の議論が出てきた背景としては、平成10（1998）年の特定非営利活動促進法（NPO法）施行により市民活動や協働が一層広がり、平成23（2011）年の東日本大震災被災地支援において、市民活動団体の取り組みが大きな役割を果たした中、江東区においても様々な地域課題の解決に向けた地域貢献活動団体の役割が注目されてきたという経緯があります。

平成23（2011）年度より、中間支援組織の設置に向けて区が設置した委員会等での継続的な話し合いが行われ、ボランティア団体や地縁組織との関係性を持つ社会福祉協議会が中間支援組織として結論づけられ、令和5（2023）年4月に設置に至りました。機能の大きな変化として、連携・協働のコーディネートや、地域貢献活動等への支援・相談助言の役割が加わりました。

江東ボランティア・センターから  
江東区ボランティア・  
地域貢献活動センターへ

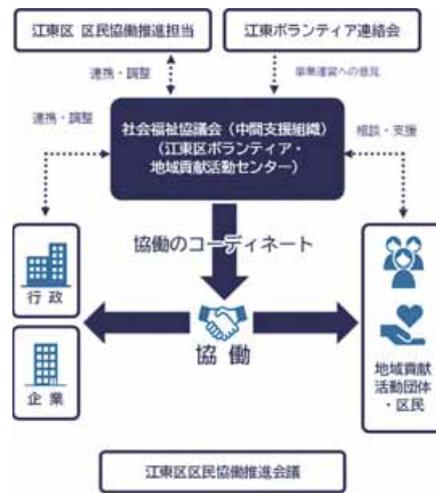


大事にしてきたことを残し、発展させる

社協として江東区ボランティア・地域貢献活動センターを受託するにあたり、江東ボランティア・センター時代に育んだボランティアや登録団体の支援機能を保ちながら、新たな団体との連携を目指しています。

従来から持つ機能として、例えば登録団体の支援があります。手話サークル、国際交流、自然環境など多岐にわたる83の団体がありました。最近では子育て支援系の団体が増えてきています。一方、活動歴が長い団体も多く、世代交代や活動の継続が課題になっています。登録団体の横のつながりとして、江東ボランティア連絡会を毎月行っており、江東区ボランティアまつりに向けた取り組み等について話し合いをしています。

また、ボランティア・センターで行っていた企業の連絡会を中間支援組織として引き継ぎ、「こ



江東区ボランティア・地域貢献活動センター イメージ図  
(江東区社会福祉協議会公式Webサイトより)

## 地域福祉コーディネーターとの協力

地域福祉コーディネーター(以下「地域Co.」)については、区の地域福祉計画に基づき、5つの圏域に地域担当として配置しました。また、令和5(2023)年度に城東地区に2箇所地域拠点を開設し、今年度さらに1箇所深川北部に開設しました。

ボランティア団体を含めた地域貢献活動団体からの相談については、VCで受けることもあります。地域で何か活動したいとなった時には、地域拠点にいる地域Co.の方が圏域内の状況をよく分かっているので、地域Co.にも相談に同席してもらったり、地域住民とつないでもらう際に、地域Co.と連携したりしています。逆に、地域Co.が地域で既存の制度では対応できないような内容の個別の相談を受けた時には、お願いできるボランティアがいないかVCの方に相談があり、対応しています。

このように地域Co.が令和5(2023)年度から各圏域への配置が進んでいるので、VCのあり方については検討しながら進めています。現在ある地域拠点は小さいためVCのような機能は置いていませんが、これからできる地域拠点はもう少しスペースがあるので、ボランティアの活動スペースを設置したり、ボランティアコーディネーターの活躍の場にできないかと考えています。



江東区ボランティア・地域貢献活動センターのみなさん



江東区社会福祉協議会  
公式Webサイト



江東区コミュニティ活動支援  
サイト「ことこみゅネット」

らばら」という社会貢献ネットワークとして継続しています。メンバーは社会貢献活動に取り組み企業、学校法人等11団体ほどで、3カ月に1回開催しています。内容はそれぞれの社会貢献的な活動の報告と共有が主で、参加している企業同士のコラボが生まれることもありました。こらばらには現在NPOの加入はなく、今後はNPOのネットワークや交流も作っていききたいという想いがあります。

加えて、ボランティアコーディネーター養成講座を終了した地域住民が、センター内で相談受付をする仕組みは続いています。ボランティア活動者のリアルな声を、これから活動を始めようとする人に直接伝えられるということをメリットとし

ており、声を聞いてやってみようと思う人も非常に多いです。

## 新たな役割を果たすために

新しく加わった役割については、連携・協働のコーディネートや、地域貢献活動への支援・相談助言があります。

具体的には、地域貢献活動の発展に向けた「地域貢献活動助成金」の交付や、専門相談の窓口の設置とそこにつながる一歩手前の支援、広報・法律相談・資金調達等に関するNPO法人等へ向けた講座を行っています。

また、もともと区が運営していたコミュニティ

活動支援サイト「ことこみゅネット」を引き継ぎ、地域貢献活動団体への情報提供を行っています。「ことこみゅネット」は、200ほどの登録団体があり、町会・自治会の登録もあります。登録条件は営利を目的としないというもので、区が運営していた時よりも直接的に団体へPRができるため、登録団体数は増えています。

このように新しく始めている事業があるものの、こういった機能を中間支援組織として担うかは引き続き模索中です。それを考えるためにも職員のステップアップの必要性を感じ、まずは中間支援組織って何するためにあるの?という初めの一歩から学び直そうと、今年度の後半から職員研修を実施しています。

社会福祉法人 平成記念会  
**OUCHI CAFE・KITCHEN**

住所 〒123-0841  
 東京都足立区西新井5-18-14

お問合せ TEL/03-6803-1755  
 FAX/03-6803-1756



公式サイト



オンラインショップ

いいもの  
 みい~つけた!

このコーナーでは、ボランティア・市民活動・福祉施設のグッズや作品を紹介します。

Vol. 58

## 素材にも製法にも こだわった ビターチョコレート

OUCHI CAFE・KITCHENでは焼き菓子、パンの製造、カフェの運営を精神障がいがある利用者さんと一緒にしています。特にチョコレートはおすすめです。カカオ豆から板チョコにするまでのすべての過程を一つの工房で行うBean to Barチョコレートです。利用者さんの特性を活かして、カカオ豆を手作業で1つずつ粉碎。その過程で出た外皮は、カカオティーとしてアップサイクル(右下図)。チョコレートのような甘い香りとすっきり香ばしい味わいです。

ニブ\*ときび砂糖を混ぜたのち、2カ月休ませるそう。そうして時間をかけて丁寧に作られたチョコレートを成形し、ラッピングも利用者さんが行います。

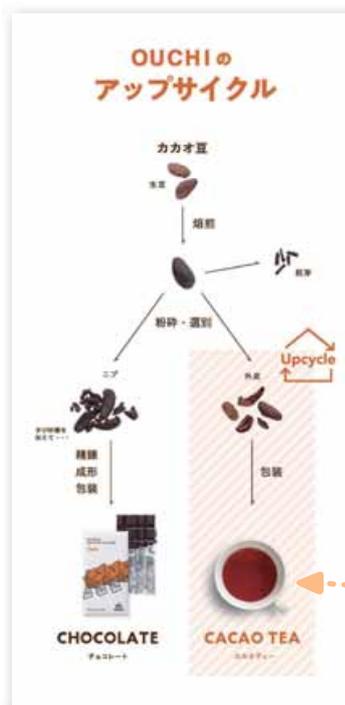
フレーバーは季節によって変わりますが、右上写真の左よりシーソルト、ダーク、ブラックペッパー、バジル、ピンクペッパー、コーヒーとわくわくするラインナップ。オンラインショップからも購入できます。

お土産にもおすすめです。ぜひご賞味ください。



写真提供：OUCHI CAFE・KITCHEN

\*焙煎したカカオ豆の胚乳を粗く砕いた粒。チョコレートの原料となる。



目を引くパッケージ。イラストの原画は利用者さんが描いている。



## ネットワーク

本誌のバックナンバーは  
右記からご覧ください。



～本誌399号より～

## 読者の声



読者の皆さんからいただいたアンケートの一部をご紹介します。

### ◆【特集】犬・猫のしあわせとわたしたち

動物愛護センターは狂犬病対策から始まった施設であることが驚きでした。現在は、問題を事前に防ぐべく、様々な人や団体と連携しながら人と動物がともに暮らせる社会への模索がされているのですね。協働による社会課題解決のプロセスの一つのモデルかもしれませんね。

動物愛護法改正に向けた議論のポイントと背景がよくわかりました。議員立法ゆえ世論の力が問われるとのことですが、一票も力ネも持たないモノ言わぬ動物たちの命、幸せを守る法の改正を前に進められるのか？私たち人間のありようが問われそうです。

犬と猫の飼育頭数が15歳未満の人口を上回るといふ事実が驚きでした。それだけ犬猫が愛されており、私たちの生活に不可欠になっているのだと思うました。全ての犬猫ちゃんに幸せになれるよう、接し方など適切に学んでいきたいです。

### ◆【せかいをみる】

若者が生きやすい社会へ  
スウェーデンでの学びと  
ユースワークの実践を通して

若者や個人を大事にする文化のあるスウェーデンはきっと日本より生きやすいだろうと思った。反対に、な

ぜスウェーデンでは学歴などが重視されないのか、どうやって自分をアピールするのかなど気になった。

### ◆【区市町村ボランティア・センター】

～日野市ボランティア・センター～

ボラセン・サボセンは、目の前の常連さん（利用団体）への親切な支援や友好関係づくりに集中しがちな気がします。でも、地域課題の解決のための具体的な取り組みをコーディネートすることを重要なミッションだと位置づけるなら、地域で活動する様々な方に積極的に会いに行き、どの地域の人もつながり続けられる関係づくりを日々実践する日野VCの取り組みは、地域に根差した中間支援組織の在り方として、とても示唆に富むものと思えます。

### ◆【いいものみいっつけた！】

さわやかはーとあーす世田谷のパン

福祉作業所のパン屋さん、時々見かけますが、どこも見た目もきれいでとてもおいしい。でも、いつも気になるのが値段、街のパン店よりけっこう安い。

お気軽にご意見・ご感想を  
お寄せください。



本誌で使用しているQRコードは、(株)デンソーウェブの登録商標です。

## 東京ボランティア・市民活動センター

(TVAC: Tokyo Voluntary Action Center)

<https://www.tvac.or.jp>

東京ボランティア・市民活動センターは、ボランティア活動をはじめとするさまざまな市民の活動を推進・支援しています。どうぞご利用ください。

### 利用

会議室 会議室A・B(各40人)・C(15人) 無料  
※会議室AB通し(80人)  
貸出機材 印刷機(1台)紙持ち込み、点字プリンター 他  
申込み 4ヶ月前から電話で受付(03-3235-1171)

### 情報提供

最新のボランティア・市民活動情報は、センターのホームページでご覧いただけます。<http://www.tvac.or.jp/>

### 開所時間

火曜日～土曜日：9時～21時／日曜日：9時～17時  
(月・祝祭日・年末年始除く)

### 交通アクセス

JR、地下鉄(東西線・有楽町線・南北線・大江戸線出口B2b)飯田橋駅下車

## ネットワーク

発行人 山巻毅  
編集委員 江尻京子(東京・多摩リサイクル市民連邦)  
片岡紀子(患者スピーカーバンク)  
小池良実(岡さんのいえTOMO)  
小淵康博(西武信用金庫)  
小林涼帆(明治大学)  
野村美奈(武蔵野会 リアン文京)  
山田恵莉香(杉並区社会福祉協議会  
杉並ボランティアセンター)

TVACの公式ソーシャルメディア



編集・発行：東京ボランティア・市民活動センター  
〒162-0823 東京都新宿区神楽河岸1-1  
セントラルプラザ10階  
TEL：03-3235-1171 FAX：03-3235-0050  
E-mail：nw@tvac.or.jp

印刷：島津印刷(株)  
デザイン：東京ボランティア・市民活動センター／  
島津印刷(株)  
表紙イラスト：フローラル信子

2026年3月20日発行(通巻No.400)  
ISBN 978-4-909393-67-8 C2036  
定価400円(本体364円+税10%)  
本誌掲載記事の無断複製・転載を禁じます。

